

勉強という名の道具

南部中・2 田邊 萌衣

誰もがぶち当たるであろうテストの壁。その先には、誰もが経験するであろう受験の壁がそびえたつ。考えるだけで気分が沈み、ハアとため息をついてしまう。一年後にはきつとみんな必死にもがきながら乗り越えようとするだろう。その中には私もいる。でも、勉強？正直言ってもやりたくない。誰がそんなのやりたいのだろう。

毎日毎日机に向かう日々。やる気がでない。面倒くさい。つまらない。自分にはどうせ無理。ネガティブな感情がどつとあふれ、嫌々ながらもシャーペンを持つ手を動かす。ずっとこれの繰り返し。

「ああ、どうして勉強しなくちゃいけないんだ。」
そんな私の問いに答えてくれた本がある。それが『手紙屋く私の受験勉強を変えた十通の手紙』だった。進路に悩む主人公和花と、手紙をやりとりすることを仕事とする手紙屋との物語。

「勉強しても意味がないような気がします。」だからと言って勉強を捨て去る勇気もなく、全部が中途半端になってしまふ和花。私も同じだった。私の将来の夢は薬剤師だ。勉強はやりたくないけれど、将来なりたい職業に就くためにはやらなきゃいけない。でもそんな気持ちでは長く続かない。勉強も部活も趣味も。やってはやめて、やってはやめて。中途半端が重なれば重なるほど肩の荷が重くなっていくのだ。

私はテスト返しが嫌いだ。現実を突きつけられて、プライドがズタズタにされる、地獄のような時間だからだ。名前を呼ばれて教卓へ。先生が私の顔を見る。その表情は、…良い点数なのか。それとも悪い点数なのか。解答题紙をもらう時の手汗の量は半端ではない。解答题紙を握りしめ重い足取りで自分の席へ。ドクンドクン。心臓

の鼓動が全身に伝わってくる。深呼吸をしても一向にそれは治まらない。震える手でおそろおそろ解答题紙を開く。この時間は中学生になって十数回経験した今でも未だに慣れない。

友達にはよくこんなことを言われる。

「萌衣だったら満点でしょ。」

と。私だからじゃないのに。ちゃんと努力しているのに。

もつと嫌なのは家族にテストを見せるとき。私には双子の姉がいる。比べられるのは無理もない。私より勉強ができる姉は

「頑張ったね。」

とほめられている。でも私の場合は

「もつと頑張れ。」

決まってそう言われる。何時間勉強しても結果に結びつかない。それならいっそのこと遊んだ方がよっぽど楽しい。好きな本を読んで。好きなアニメを見て。好きなスポーツをして。好きな買い物をして。好きな音楽を聞いて。なのになぜだろう。自分の好きなこと、楽しいことをしているつもりなのに、モヤモヤした気持ちに襲われる。やりたいのにやらせてくれない。勉強という名の重い鎖が私をがんじがらめにする。

「ああ、勉強やめたいな。」

でももしやめたら？自分がなりたいものになれなくなってしまう。それは嫌だ。きつと後悔する。せめて勉強は楽しくやりたい。でもやれない。変わりたい。けど変われない。私は一体どうすればいい？そんな気持ちを抱きながらページをめくると、ふとある言葉が目にとまった。

「勉強という道具は、自分をピカピカに磨いて、昨日とは違う自分になるためにある。」

体中に電流が走った気がした。私は勉強という道具をどのように使っていた？

「親に怒られたくないから。」

「友達に馬鹿にされたくないから。」

そうか。私は、まわりの人の目を気にしないようにするために勉強していたのか。そう思った。私は自分自身を磨けていたのだろうか。いや自信をもつてそうは言えない。でもこれからは、勉強という道具を

「自分を超えるために使いたい。」

と思った。それから私は早速机に向かい、問題集を開いて解いていく。やる気満々。頑張るぞ！私なら解ける。驚くことに、さっきまでのネガティブな言葉たちはどこかへ飛んでいってしまった。間違えた問題や新たな問題を、解けば解くほど成長している気がした。すぐに結果に結びつくとは限らない。けれど、勉強したことは私だけの武器になる。着々と進み続けて、完全装備で受験を乗りこえていきたい。将来なりたい自分になるために。

一問また一問と問題を解いていく。

「勉強って楽しい。」

受験という名の壁。相変わらず私の前にそびえたつ。でも私は突き進む。一年後その壁を乗り越えられるように。この私だけの武器、勉強という名の道具と共に。